

(別紙 2)

## 論文審査の結果の要旨

氏名 臼井佐知子

明・清時代の徽州府（現在その主要部分は安徽省黄山市に属す）は安徽省南部の山間地帯に位置し、塩の専売などに従事する有力商人を輩出した地方であるとともに、当時の社会経済の状況を生き生きと伝える地方文書や族譜などの文献を大量に残しており、今日の明・清史研究の一つの焦点として多くの研究者の関心を集めている地域である。本研究は、明・清時代の徽州に関する従来の研究蓄積を踏まえ、さらに中国における徽州研究の最先端を担う研究者たちとの密接な交流のもとに、大量の族譜や未公開の徽州文書を駆使して、徽州商人及びその子孫たちの活動の諸側面を明らかにしようとしたものである。

本研究は三部から構成される。第一部「徽州商人とその商業活動」では、明・清時代における商業観の変化、商人と国家権力との関係、徽州商人の商業ネットワーク、等の問題が鳥瞰的に論じられる。第二部「徽州における典当と典当業経営」では、特に「典当」（質入に近似した概念）に焦点を当て、契約文書史料の詳細な分析を通じて、不動産の典当及び典当業（質屋）経営の具体像が提示される。第三部「徽州における宗族関係」は、宗族（男系出自集団）に関する考察であり、多くの支派を統合する「拡大系統化型」族譜の編纂、「承継」（祖先祭祀・家産の継承）に関する各種契約関係、家産分割に関する契約、などが克明に分析されている。

他の徽州研究と比較して本研究の特色は、徽州地方のみを分析の対象とするのではなく、徽州出身の商人たちが長江中・下流域の各地に定着し、新たな社会関係を作り上げてゆく動態的な過程を広い視野から扱っていること（第一部）、及び豊富な原文書を使用し、土地契約、商業経営、家産継承・分割などの多彩なヴァリエーションが提示されていること（第二部、第三部）にあるといえよう。特に、第一部の分析がやや概論的であるのに対し、第二部・第三部の分析は、従来一般的に論じられてきた明・清時代の民事慣行に関して、具体的な史料に基づく再検討を行なったもので、今後の学界において必ず参照されるべき着実な成果と評価することができる。

各部・各章の所論が十分に有機的に接合されておらず、その結果、本研究全体としての論旨が読者に明確に伝わりにくくなっている点、中国語の先行研究が網羅的に参照されている反面、日本や欧米の先行研究の把握にやや不備がある点、など問題点も残されているが、長年にわたる大量の史料収集とその整理に基づく実証的な研究成果として、日本のみならず国際的な明・清社会経済史研究に寄与しうる業績といえることができる。以上より、審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当すると判断するものである。